

**令和4年度秋田県社会福祉審議会児童福祉専門分科会
子ども・子育て部会（秋田県版子ども・子育て会議）
議事要旨**

- 1 日時 令和4年10月20日（木）10:00～11:40
- 2 会場 秋田県議会棟 2階 特別会議室
- 3 出席者
《部会委員》上野智明委員、織田栄子委員、工藤留美委員、後藤節子委員、山名裕子委員、
小泉ひろみ委員、武田正廣委員、田中真理子委員、安田敦子委員、山崎純委員 10名

《県》 あきた未来創造部 水澤次長、次世代・女性活躍支援課 六澤課長、佐藤政策監、
地域・家庭福祉課 佐藤課長、保健・疾病対策課 武藤課長、
教育庁幼保推進課 熊谷課長、教育庁生涯学習課 佐々木班長、佐藤社会教育主事
- 4 議事概要
 - (1) 挨拶（水澤あきた未来創造部次長）
 - (2) 報告
資料1及び資料2に基づき説明（事務局）
 - 山名部会長
ただいまの説明に対するご意見、ご質問はないか。
 - 武田委員
基本施策1のみなし保育士の研修について、私たちは大変助かっているが、質の向上という面で、資格を取るための研修はあるが、資格取得後の人たちを対象とした研修などは考えられているのか？
 - 幼保推進課長
ご指摘の部分については、現時点では実施しておりませんので、今後実施できるかどうかも含め、研究してまいります。
 - 武田委員
是非、検討していただければありがたい。よろしく願います。
 - 山名部会長
ありがとうございました。山崎委員、いかがか。
 - 山崎委員
基本施策2について、二点意見させていただきたい。
私の方では、秋田市からの委託を受けて親子の居場所づくりという「広場」を運営している。令和2年度と3年度はコロナの影響を受け、1日の利用者の組数を比較したときに、2年度、3年度とどんどん下がっていった、4年度ようやく、3年度の1日利用者数に追いついたところである。令和元年度までとはいかないが、少しずつ利用者数が増えてきている。
資料2のP19によると、子育て支援拠点の年間利用者数は下がっているが、その理由としてはコロナの影響を受けてのことだと考える。まだ落ち着いたとは言えないが、今この時期に考えていただきたいこととして、2年度、3年度と、特に就労している世帯で保育所に行けない、

子どもの預け先をどうするか、ということに困っていた。この先また大きな波がやってきたときの対策を、是非今落ち着いているときに考えていただきたい。秋田県を含め日本全体で女性の活躍支援を応援しているのであれば、そうした状況においても女性、男性を含め、普段の生活を継続して仕事に取り組める体制は必要であるため、そのフォローを考えていただきたい。

もう一点は、ひとり親家庭の支援である。離婚が増え、女性が子どもを養育しているケースが多いように感じている。面会交流の場がなかなか無いことが大変であり、面会交流を希望するが、相手方と子どもだけで過ごす時間に不安があるという声を聞いて、私たちはその見守りを担っている。秋田市や秋田県には、面会交流のときの見守る体制がないが、岩手県盛岡市には、民間で面会交流のサポートをしている団体がある。面会交流時のサポート体制というのは、離婚率が高まっているのと同時に必要になってくる支援であるため、この計画の中に盛り込んではいないが、何らかの形で対策をたてていただければと思う。

○山名部会長

ありがとうございます。後藤委員、今のお話に関連して、あるいは他のことでもいかがか。

●後藤委員

資料2のP2(15)に、新型コロナウイルス感染症のために大抵の施設や団体ではボランティアを受け入れできないが、児童会館ではボランティアを受け入れていることについて記載がある。私達は秋田県児童会館を運営しているが、児童会館でも小さい子と触れ合ったときのリスクを考え、現在は高校生のボランティアは受け入れていない状況であるが、県が出前講座などで、宣伝してくれているので、ボランティアに関する問い合わせはたくさんあり、その際は、子ども食堂のお手伝いをお願いし、来てもらっている。

その中には、不登校ではあるが、自分の自己肯定感を上げるために何かしたいという子ども達がいったり、困っている自分のこういう気持ちを拾ってくれる情報がないという子どもが多い。学校で教えてくれる相談場所はあるが、そうではなく、ボランティアで自己肯定感を高めたいという子ども達が多いので、そういう受け皿が必要なのではと常々思っている。こういったことも本当に必要だと思うが、どこに繋がたらそれが可能なのか、どこでそれを繋げてくれるのか。行政ではなく、山崎委員のところのような支援しているNPOが窓口になってくれると、お母さんやお父さんも相談しやすいと思う。

独身で通すというのも一つの選択であり、みんなが「結婚しよう」という気持ちになることはないと思うが、今2人産もうとしている人が5人産むことは可能だと思う。児童会館に来るお母さんの中には、オムツ代や助けてほしいことなどへの支援がたくさんあれば、5人産んでもいい、と言っている元気なお母さんもいる。子どもを預かってもらえたり、仲間がいて話ができるなど、お金だけではない支援が少しあると、子どもはかわいい、子どもをもう少し産みたいなどと思っている方は多いので、そういった支援も必要だと考えている。

○山名部会長

田中委員、もしこの話題で何かあればいかがか。

●田中委員

私は能代市の二ツ井町で3人の子育てをしている。皆さんの意見を聞いて、とても参考になり、こういう意見があるんだなと聞かせてもらった。

二ツ井では、少子化はとても重要な問題であり、子育て支援センターや学童は一つあれば十分であるため、これからは新しい物を作るというよりは、今ある物をどう活用して少子化を乗り切っていくかを考えていかなければならないことなど考えさせられた。三種町でも新しく産後ケア等に力を入れているところもあるので、サークルとしてもそういったところと協力して頑張っていきたい。

○山名部会長

ありがとうございます。工藤委員も子育ての場でサポートをされているが、ご意見ないか。

●工藤委員

私はこの4月から「ハラッパAFTER SCHOOL」という学童保育を始めており、自分の施設内だけでなく、近くにある秋田市文化創造館にいるデザイナーに入ってもらい、子ども達がデザインした物をブラッシュアップして商品を作るなどといった地域活動にもつながればいいと思います、試行錯誤しながら取り組んでいる。

昨日まで神戸の「デザイン・クリエイティブセンター神戸」と三宮図書館に視察に行っていたが、そこでは子ども達がプロの作り手や大人と関わりながら、子ども達自身が自分の夢の町をつくるという取組をしている。個々にある学校や幼稚園、学童保育が、行政や地域の人たち、企業ともっと繋がって子育てを進めていくようなおもしろい取組を、秋田でも試行錯誤でいいので実績を積み重ねていくことが大事なのではと思った。

学童保育を始めたところ、子ども達が常にいるため、いろいろな問題や困り事が見えてきた。一つは保護者の送迎。学校や学童保育だけではなく、地域の図書館や文化施設など、子ども達が自分の足でその目的地に行くことで、子ども達が自分達の足で町を楽しむことができ、それにより魅力的な町になっていき、またバスの本数など、地域の子どもを取り巻くいろいろなデザインにも関わっていくのではと思う。

もう一つは、学童保育の子ども達やその保護者から、学校の先生から理不尽なことで叱られたり、管理されたりしていることが伝わってきていること。先ほど保育の質の向上のための研修の話があったが、若い世代の先生たちは、新しい教育から学ぼうとする力があると思うが、年齢が上の先生は、今までの教育をそのまま押しつけているような情報も耳にすることがある。子育てには関わる人がいればいるほどよいと思うが、質の向上が必要だと思ってる。

○山名部会長

小学校の立場から上野委員、いかがか。

●上野委員

確かにそのとおりでと思うところもある。子ども達の放課後を過ごす場所として、児童館、児童センター、学童クラブ等に大変手厚く見守ってもらっていること、また不登校や発達障害の問題等のある子ども達に対しても、手厚く関わってもらっていることを感じている。

小学校と幼保教育施設との連携をもっと進めていくために幼保小連絡協議会があるが、例えばその中で、秋田県やいろいろな企業等での子どもや子育て支援に係る取組を話してもらえれば、我々教職員ももっと身近に問題を理解することができると思う。もっと関心を持ってこうした問題に接していかなければと思う。

○山名部会長

ありがとうございました。こうした施策を知らないというのは、取組の広報活動に問題があるのだろうか。

●上野委員

広報の問題というよりも、学校現場で抱えている問題もあると思う。今、働き方改革ということで取り組んでいるが、業務の関係でなかなか目が届かないところもある。

資料2のP17に教職員を対象としたオンライン研修が年3回行われているとあるが、実施時期が6月や7月なので、研修は夏休みや冬休みの長期休業中に実施していただくと、参加できると考えている。実施時期を含め、我々もそうしたものに広く触れる機会が持てるような形にしていいただければありがたい。

○山名部会長

ありがとうございました。その他の委員の方から意見はないか。

●後藤委員

今回、私たちは福祉医療機構から助成金をもらい、仙北市を子育てリゾートの町にという目標を掲げ、5組の小さな子どもを育てている方々をモニターとして招待し、ホテルに1泊後、仙北市の親子と一緒にイベントを楽しんでもらうということを企画している。やりながら失敗もしながらという段階のため、あまり大きく宣伝をしていない。仙北市のホテルにワーキングスペースを作り、子育ての大変な時期だけそこに滞在する、そういったことで子育て期間を楽しく乗り切れるようなことに挑戦している。その経験が良ければ、秋田に移住してくれる人もいるかもしれない。今は助成金をもらっているが、市や県が支援してくれるとチャレンジしやすいし、いろいろなNPOが参画できるのではと思っている。

●小泉委員

教育の場でいつも違和感を感じるのは、明るくて元気で前向きで頑張る子だけが賞賛されていることである。生きていく上で生じるネガティブな気持ちや、ネガティブな気持ちを抱えながら歩んでゆけるということが大事であり、そうした人間づくりが、非常に大事だと思っている。

不登校の子と会って、その子の「死にたい」という気持ちを聞きつつ、つらい気持ちに寄り添いながら伴走できる人がとても少なくなった。

自殺願望を持った人が事件に巻き込まれて亡くなるニュース報道があるが、ネットパトロールもしているので、話を聞いてくれる方に繋がればよい。

母子保健では、お母さんごと抱え込む児童虐待防止が、貧困では、家庭ごと抱えていく対策が大切である。その他、例えばLGBTの問題等もある。

例えば子どもの「死にたい」という言葉の裏には「より良く生きたい」などの思いがあるため、行間に埋もれている所を埋めていく必要がある。

○山名部会長

ネガティブな情報は容易に広まるが、大事な情報は届けたい人に届かなかつたりすることがある。望まない妊娠をしている若いお母さんや、自分の家族に頼ることのできない若い方など、隙間の施策も大事だと思う。

(3) 審議

資料3に基づき説明（事務局）

○山名部会長

事務局の説明について、意見のある方はお願いします。

●小泉委員

一番最後の歩道整備率について、各県で子どもが巻き込まれる事故等があるが、歩道整備率はもう少し上がった方がいいのかどうか、その辺りの数字の意味をお知らせいただきたい。

□事務局

小泉委員の求める資料を用意していないため、後日文章で回答する。

●小泉委員

通学路であれば、もっと高い率を求めたいと思うが。

●武田委員

私も同じところを疑問に思っていたが、道路整備の数値とは別に、安全な通学路を確保するという数値を独自に決めてもよいのでは。今の目標値が50%以下というのは、どこかに責任が

くるのではないか。整備率を上げていくのが目標で、例えば道路両側の幅2.5mの歩道の整備が非常に難しいのであれば、実際に通学できる道路の整備をどうするのかについてを示した方がよい。

冬場の通学路の歩道の除雪が非常に問題になっている。車道を除雪すると歩道に大きな雪山ができ、子ども達がその上を踏み固めて歩いて行くという状況が続くので、それを解消したい。実際の問題に合わせた形でどのように取り組んでいくかという数値にした方が、私たちにも捉えやすいのでは、と思う。

○山名部会長

事務局はいかがか。担当課が不在でも回答可能か。

○次世代・女性活躍支援課長

今承ったご意見は、担当課が不在のため、この会議の後できちんとお伝えしたい。

○山名部会長

よろしく願います。今の件は後ほど書面で皆様にお伝えしていただくが、この時点で第3期すこやかあきた夢っ子プランの修正について、事務局案のとおり一部修正するとしてよろしいか。

●委員

異議無し。

○山名部会長

ありがとうございました。それでは、事務局案を本部会の意見とする。

(4) 意見交換

○山名部会長

委員の皆様から、ご意見や取組の報告などないか。安田委員いかがか。

●安田委員

本学の現状のお話を少しさせていただく。現在、就職活動のまっただ中であるが、学校として例年100名を超える県内就職を目指しているのに対し、県内に就職を希望している学生が100名を切っている。就職が決まっている学生はまだ半分以下のため、これから就職の本格的な活動が始まる。

本学で取り組んでいるキャリア教育の中で、学生にキャリアプランに取り組んでもらっている。20代、30代、40代、50代、60代といろいろなプランを考えてもらうが、ほとんどの学生が20代後半から30代前半にかけて、結婚して出産というプランを書き、ほっとしている。それを実現できるように進めていってほしいし、また、保育士を目指す学生達であるので、働きながら自身の育児とか人生のプランを実現できたらいいと思う。

本学では、学校の中に子育て支援室「もくもく」を設けている。親子で訪れて遊びながら、お母さん達はそこにいる教員等に悩みなどを相談することができる。先日初めて「もくもく」をアルヴェで行ったが、コロナ対策のため人数制限があり、自由に参加してもらうことができなかった。こうした取組を続けていきたい。

秋田で結婚・子育て応援キャンペーンは、とても素晴らしい活動だと感じた。結婚相談センターでは、オンラインで手続きができ、よいと思う。今、知り合うために無料のアプリを使う男女が多いと聞いている。県の結婚相談センターは無料なのか、それとも会費があるのか。費用がかかる場合には、支援し、収入が少ない男女が参加できるシステムがあればいい。

○次世代・女性活躍支援課長

ご意見ありがとうございました。

結婚支援センターの会費は、2年間で一万円だが、各市町村の助成があり、無料で入会できる。また、オンラインの入会も可能である。お相手検索も、オンラインでできる。今は、「AIマッチング」で交際に発展する率が以前よりも高くなっている。価値観診断というものを受けて、交際に発展する率が高い。その後の悩みの相談や結婚に向けてのアドバイスなどはコーディネーターがきめ細かく行うので、安心してご活用いただきたい。

○山名部会長

AIでの診断はおもしろそうだが、怖いと思ったりする場合に、その後のコーディネーターのフォローがあるということで、安心するかもしれない。織田委員いかがか。

●織田委員

私から、保育士修学資金について県にお願いしたい。多くの学生がこの制度を利用して、それにより県外就職ではなく、県内にとどまって地元就職する学生が大分定着してきているので、このまま続けてもらいたい。

もう一つ、保育所や幼稚園の先生の資格を持ちながら、今就職していない方や離職した方々への支援をお願いしたい。若者が少ないこと、保育所、幼稚園の先生の資格を持っていても、働いていない方が多いということを考えれば、掘り起こしも大事である。働いていなかった方に急に就職というのはハードルが高い場合もあるので、研修の機会や、就職するための準備金、リクルート活動のサポートがあれば就職の後押しになり保育所などにまた就職しようとする方がもっと出てくるのではないかと思う。

○山名部会長

ありがとうございました。他の委員はいかがか。

●山崎委員

「若者」と一括りにできないのではないか。20代前半、後半、30代前半、後半、それぞれ置かれている立ち位置によって課題や必要な支援も違ってくる。少子化対策としては、早めに結婚や出産をしなければ、2人目、3人目になかなか繋がらないと思う。結婚・子育ての充実・強化はすばらしいと思うが、20代前半の男女に対する支援を手厚くしないと、繋がっていかないのでは。20代前半の人たちには、所得の問題が非常に大きい。日常生活のことでいっぱい、結婚は夢のまた夢だという若者が多いと感じる。賃金や所得の問題であり、子育て支援の中で直接的な支援はできないと思うが、他の課と連携しながら充実させていくことが、結局は少子化対策に繋がっていくのではないか。

○山名部会長

20代前半で大学を卒業して、自分のキャリアを描きつつ、というところと重なると余計に難しいと思う。

□次世代・女性活躍支援課長

ご意見ありがとうございました。

全くそのとおりだと感じている。全国的にも結婚を望まない若者が増えているというニュースも多く出ているが、県内のアンケート結果では、7割以上の方が、すぐに結婚したい、又はいずれは結婚したいと、結婚というものをいつか漠然とでもしたいということだったので、そうした希望が叶うように、出会いの機会の創出に取り組んでいる。また、経済的な不安や自由がなくなるのではという不安があるようなので、特に高校生、大学生、社会に入りたての人にライフプランを考える機会の提供や、大学の講座をお借りして、お金のことや妊娠について正しい情報を提供して考えてもらうといった啓発の取組を行っている。平均初婚年齢は29歳、30歳くらいだが、実は結婚の届け出件数が多いのは26歳で、結婚年齢の高い方が平均を引き上げている。結婚したい人は早めに行動するよう啓発しているが、不安があるとなかなかできない

ため、少子化問題に対しては、全庁を挙げて、賃金や働く場の確保など様々なことをしなければならぬと捉えている。ご意見そのとおりに承らせていただきたい。

○山名部会長

子どもを育てながら働いている環境の整備、貧困の問題など、いろいろな問題と繋がっている。他の委員の方で何かご意見あれば。

●武田委員

少子化に関して、学校の中で一番先に影響を受けるのは私たちのところだと思う。保育所でも、県の研修大会の時にそれを大きな問題として取り上げていた。少子化により運営が成り立たなくなった法人をどのようにしていくかは、私たち幼稚園や認定こども園の方にも同じく言えること。少子化というのは非常に大きな問題であるので、県の方でも力を入れて、真剣に頑張っていたいただきたい。

こども家庭庁ができる、これから運営していく上でどのようにになるのか。こども家庭庁ができて、幼稚園は文科省に残る。これまでのいろいろな歴史もあって私たちもどのようになるのか心配しているところである。

○山名部会長

ありがとうございました。その他ご意見いかがか。

●小泉委員

基本施策7番目の「子どもの自立」であるが、子どもの自立に対して、親も子も経済的自立、精神的自立というところは、イメージしているが、生活力としての自立のスキルが全く教育現場でイメージされていない。お手伝いという言葉に違和感を感じているのだが、家族の一員として保育園、幼稚園の頃から当たり前のようにスキルを身につけていくと、例えば、学校に行っても一人で生きていける。今回のプランには入らないかもしれないが、生きる力として、教育現場で子どもの自立の中に生活スキルというものを是非入れていただきたい。

○山名部会長

ありがとうございました。

●工藤委員

学童保育を始めてから、子ども達の生活や遊びの様子が具体的に見られるようになってきた。話を聞いてもらいたい子の背景には親が仕事の忙しさで子どもときちんと向き合っていないと感じることがある。1対1でその子の背景を見極めながら声をかける大人の関わりというものが必要である。

共働きや女性活躍が進めば進むほど、子どもの置かれている環境というのが、なおざりにされていくのではないかと感じられるため、仕事を進めていく一方で、子ども一人ひとりに寄り添うことがより大事だと思う。

遊びの中で心が解放されるから、少し本当のことが言えるのではと思うので、学校も授業の準備で大変だとは思いますが、もう少し子どもの正直な言葉が発せられる場になればいい。

生活のスキルというお話があったが、カードゲームを持って行けた学校で、数か月後に、トラブルがあったから禁止にされた。カードを取り上げるだけではなく、なぜトラブルが起こったのか、どうしたらトラブルにならないか、友達同士で遊べるようどのようにして自分達でやっていったらいいか、という導き方こそ教科書にはない道徳ではないか。子ども達がより良くこの社会で生きるためのスキルを身につけていけるような教育現場になってほしい。

○山名部会長

ありがとうございます。

(5) その他

資料4に基づき説明。(加藤班長)

5 閉会